別所重棟の虚像と実像

――『別所記』に見る赤松氏の誇り――

山上登志美

（一）

『別所記』の作者が、三木合戦に参戦した別所氏譜代の家臣・米野弥一右衛門であるにもかかわらず、敵方の秀吉の自己宣伝のために書かれた大村由己著『播州御征伐之事』（『天正記』の中の一冊。以下、『御征伐』と略す。）を全面的に取り入れ、それに三木方武士たちの活躍を書き加えて成ったことは、明らかである。[1]『御征伐』は末尾に、秀吉への賛美とともに戦後の復興を遂げていく三木の町を書いているが、『別所記』はこれさえもそのまま取り入れ、秀吉を誉める言葉で末尾をしめくくっている。この他にも『別所記』が『御征伐』をそっくりそのまま取り込んだ箇所は多くあり、『御征伐』を全面的にとりいれた跡がよくわかるのであるが、唯一、例外的に、『別所記』が『御征伐』とはまったく違った描き方をしている点がある。長治の叔父二人－吉親（賀相）と重棟についてである。

まず『御征伐』と『別所記』の冒頭部分を比べてみよう。二つの作品の末尾部分が酷似しているのに対して、冒頭部分にはかなりの違いが見られる。

『播州御征伐之事』[2]冒頭部

抑播磨東八郡之守護別所小三郎長治、対羽柴筑前守秀吉、尋矛楯之濫觴、天正六歳三月之初、秀吉承将軍之御下知、西国為征伐之備下向彼地事、長治一味同心之故也。同月七

日、秀吉至于播州国衙布陣。爰ニ有謂長治伯父別所山城守賀相俟人。相語長治曰、秀吉入此地有白山之働。殊終可及身、逆戈従中途帰、楯籠於三木城郭。同名孫右衛門尉重棟、与秀吉為久要。依之左右之半、其理雖覃数十ヶ度、彼蠢人賀相破事不用。

『別所記』冒頭部

別所小三郎長治ハ村上源氏具平親王二十六代ノ孫、赤松入道円心之末葉也。領播州東入郡在三木城。得武将之誉、其門葉繁昌シテ風俗異于他。同姓ノ侍大将山城守吉親、舎弟之孫右衛門尉重棟両人執権政道明也。永禄年中三好修理大夫企悪叛奉討大樹義輝卿。御舎弟義昭公従南都牢々シテ往濃州岐阜頼織田信長。追討三好一族刻、別所ガ館エ可為合力ノ由被成御教書。故一家会合シテ孫右衛門を撰出シ、軍勢以三百人令上洛、京白河ノ戦ニ畿内無陰、尽粉骨追払敵。依之三好ガ残党敗北シテ義昭卿被遂御本意ノ後、一番ニ孫右衛門ヲ被召出、蒙御感。一家ノ名望也。依之侈高大ニシテ不一族ノ侍、剰舎兄山城守ヲモ侮ル故兄弟不和ニ成、吉親方、重棟方ト二派ニ成、背法者多シ。当家滅亡ノ端也。然バ今度秀吉ト度々ノ合戦ニモ味方失利、一家右往左往ニナリシモ此故也。

『御征伐』は「俟人賀相」が信長に同意していた長治をそそのかしたことを別所氏滅亡の原因としているのに対して、『別所記』は三好氏追討に功績のあった重棟の奢りによる兄弟仲の悪さに原因を求めている。このように吉親と重棟の描き方は、そのまま別所氏滅亡の原因のとらえ方につながる問題であるといえる。

長治の二人の叔父、特に別所一族の中でただ一人秀吉方についた重棟の虚像と実像を追いながら、『別所記』が『御征伐』とは違ったところに別所氏滅亡の原因を求めたわけを探っていきたい。

（二）

それでは、一旦は信長の傘下に入りながら、何故、別所長治は秀吉を裏切ったのか、その理由について『別所記』は次のように書いている。別所氏の協力を期待した織田信長は、毛利氏攻略のため秀吉を播州へ出兵させる。そこへ、別所山城守吉親と三宅治忠が、軍評定のため秀吉と面会する。「不日ニ擒敵ス

ル謀計モヤアル」との秀吉の問いに、治忠は別所家に代々伝わる兵法を延々語る。現実には意味を成さない長談義に退屈したであろう秀吉は、「各ハ先手ノ役ニテ候ヘバ、働等ノ事隨分被入精候へ。得勝利下地(知カ)ハ大将役ニ此方ヨリ差図可申」と「ニクテイ」に言ったとする。閉口して三木城に帰った吉親が、

今度秀吉当国エ下向シテ、近国他国ニ威ヲ振フ。別所ノ家臣ニ向ヒ遠慮モナク我意ヲ振舞ノミナラズ、剰我下人ノ如ニ挨拶シ、国人ニ首ヲ上サセヌ様ニスルコト心底ヲ察スルニ、信長ノ謀計ト存ズ。其子細ハ、近年東国ノ沙汰ヲ聞クニ、関東ニ有四大将。北條氏康、武田信玄、織田信長、上杉輝虎也。其内信長ノ武勇カタキハ表裏弟(第カ)一也。表裏ニ善悪ノ二ツアリ。武士ノ敵ヲ計ル謀略ハ各別ノ事也。信長ハ偽ヲ専成シ給フニヨリ家風下々迄軽薄多シ。唯今思案スルニ、秀吉当国エ下向ノ内談ハ、先長治ニ中国ノ先手ヲサセ、西国於静謐ハ初ノ変約、往々長治ヲ退治シ播州ハ秀吉ニ可与行信長ノ心底如移鏡。敵ノ表裏ヲ知リナガラ謀ニ乗ランコト、武士タラン者似無思慮。此方ヨリ色ヲ立ン。

と一族を前にして言うと、長治は、「信長昨今ノ取立漸ク侍ノマネヲスル秀吉ヲ大将ニシテ、長治カレガ先ニテ軍セバ、天下ノ物笑タルベシ」とまで言い切って秀吉に反旗を翻し、籠城の支度を始める。

『御征伐』が先にあげたように長治の翻意を讒人吉親のせいと簡単にすましているのに対して、『別所記』は、かなり詳しく別所氏の内情を書いている。『別所記』の吉親が、信長は偽りを専にする武将であり、ゆくゆくは秀吉に播州を与えることは明確である、と述べているところは、『御征伐』が佞人吉親が長治をそそのかしたとするところに呼応しているようでおもしろい。『別所記』は、『御征伐』が吉親を「佞人」とした理由を説明しているかのようである。

このあたりを読むと、別所氏がいかに赤松氏の流れを汲む血筋に誇りを持っていたかがわかるであろう。それは、『別所記』が「別所小三郎長治ハ村上源氏具平親王二十六代ノ孫、赤松円心之末葉也」という文章で始まることや、「敵引取バ付慕ヒ、敵返サバ城ニ引篭」戦法が、「当家ノ累祖赤松円心苔縄ノ城ヨリ打出、右ノ手立ヲシテ敵ヲ攻亡シ、上武名末代被賞。元弘ノ吉例ニ候カシ」との別所甚太夫の意見によって取り入れられたことを見ても明らかである。秀吉との対立の始まりを三宅治忠の兵法論議とした理由は、松林靖明先生のご指摘[4]にもあるように、赤松氏の末裔を以て任ずる別所氏にとって、南北朝以来の兵法の家としての面目を、成り上がり者の秀吉如きに侮辱され

たのは許し難いことであり、播磨にあって赤松氏を知る者にとっては納得しやすいことだからであろう。「信長昨今ノ取立漸ク侍ノマネヲスル秀吉」の指図で動くことを、赤松氏末流としてのプライドが許さないのである。『別所記』は、たとえりっぱな武将であったとしても、氏素性のわからない秀吉の風下に立つことを長治が拒んだ理由も十分に描ききっていると言える。

別所の逆心に慌てた秀吉は、重棟を呼び寄せ真意を尋ねた後、彼を通じて長治へ文を送り、長治を説き伏せようと試みるが失敗に終わる。重棟が『別所記』に登場するのは、この場面が最後である。史実の上では、彼はこの後も三木合戦でかなりの活躍が認められるのだが、何故か『別所記』は重棟についてはこれ以上触れてはいない。その理由を探る前に、三木合戦における重棟の足跡を史料に見てみよう。

(三)

別所重棟は、元亀元年ごろから、長治を伴って度々上洛して信長に謁見し、また、天正五年二月には、重棟と長治は信長の雑賀攻めに従っている(『信長公記』・『武功夜話』)。別所氏が信長に組するに至った契機を『武功夜話』が伝えている。

播州別所氏は、元播州の地頭赤松円心の後胤、播州印南郡別所の郷より起る筋目の家なり。始め大蔵少輔安治、播州東三郡を領す、三木城に拠る嫡子小三郎なり。大蔵少輔安治の舎弟孫右衛門は、去る天正乙亥年信長公に一和の人。此度蜂須賀彦右衛門尉、伊丹の荒木摂津守仲人、三野庄の別所小三郎を諭し信長公に同心候なり。別所賀相は孫右衛門尉の舎弟なり。播州飾西郡五着の城主小寺藤兵衛尉子なきゆえ、族の国衙庄姫路の城主小寺美濃守なる人、美作の岩屋城責口に討死名を宗円という。その子加賀守また討死、その後藤兵衛尉の家老小寺右近大夫なる者目代と相成り姫路の山城を守るところなり。そもそも此度五着城主小寺藤兵衛尉、信長公に一身同心の濫觴は、蜂須賀彦右衛門、荒木摂津守をして五着城主小寺藤兵衛尉政職を説得、この両名の者、一和別所孫右衛門を引き入れ、別所在城の三野庄別所小三郎を諭し候なり。(中略)

先頃西国毛利輝元、信長公に御敵の色を立て、大坂石山本願寺の顕如上人に同心、五百有余艘の軍船をもって難波木津口に乗り入れ、余勢をもって播州を窺うところ、三木本城の別所族中の意見まちまち、すなわち孫右衛門尉兼てより信長公に同心の者に候も、伯父御の別所賀相なる人猶

疑の念あり。本城の小三郎も仲々もって決着仕らずのところ、彦右衛門尉、荒木摂津守並に小寺藤兵衛同座して説得候なり。此度の筑前様播州表へ出向に付き、右の旨相伝え質子を進上し同心候なり。

（巻六　織田信長公、別所長治、小寺政職と拝謁する事、黒田官兵衛孝高の事、播州表の事）

荒木村重と小寺政職がまず重棟を引き入れ、「猜疑の念」のある吉親の意見もあって、毛利・石山本願寺につくか、信長につくか、三木城内でも意見が分かれ迷っていた長治を、重棟が口説いて信長方につかせたらしい。天正五年十二月、重棟は、秀吉の口ききで、小寺政職の家人・黒田官兵衛孝高の嫡子松寿丸に娘を嫁がせている。[5] 重棟をしっかり味方に引き入れ、別所氏とのつながりを深めようとする秀吉の意図が読める。しかし長治は突然反旗を翻し、秀吉と対立する。

一連の三木合戦において、重棟が参戦していたことが確認できるのは、野口合戦と高砂城攻めである。別所方に味方した長井四郎左衛門尉邦時が籠る野口城を攻める直前、重棟は野口城の南方、海辺近くに位置する阿閇の砦を守っていた。天正六年四月二日、この阿閇に毛利軍と雑賀の者が攻撃をしかけたので、秀吉は黒田官兵衛を派遣し、撃退した旨を伝える、信長から秀吉に宛てた書状が残っている。[6] おそらく毛利水軍を警戒して阿閇を守っていたのであろう。その後、重棟は野口城攻めに参加した。合戦は激戦であったらしく、重棟は負傷しながらも手柄をたてている。[7]

更に、高砂城攻めについては、『御征伐』も『別所記』にも記されていないが、別所方の武将、梶原平三兵衛景行の守る高砂城へは、重棟が主になって攻め寄せている。[8]

このように史料の上では重棟の戦功がいくつか確かめられるのだが、重棟が最も活躍するのは三木落城のときである。『武功夜話』にはこのときの重棟の奔走が詳しく伝えられており、『御征伐』も『別所記』も書かなかった重棟の素顔を垣間見ることができる。属城をすべて落とされ、孤城となった三木城は、糧道を絶たれ、極度の飢餓状態に陥っていた。立て籠もる兵たちは刀を持つ力も尽き、誰の目にも秀吉軍が攻め入れば、手間もなく落城するのは明らかであった。

三木取詰めの模様、前野将右衛門尉、浅野弥兵衛尉、蜂須賀彦右衛門尉御三将二の丸まで押し入り、御門前に陣取り候由に候。別所類縁の者孫右衛門切々に嘆願候。城中の士卒の命何とぞ御助けあるべく行申し語り候。御三将御聞き入れなされ候。

（『武功夜話』第八「播州三木別所一党の者、一歳有半の籠城の末、落去の顚末の事」）

続いて重棟は、「兄吉親は自分を不忠者だといった、黒田官兵衛の息子に自分の娘を嫁がせたが、これは長治も納得ずみのことだったのに、吉親一人は了承しなかった」と言ったと『武功夜話』は伝えている。「斯くなる上は是非無き事に候、先年荒木が見せしめもこれあり、家来ども不憫と思い候えば、武門の面目を相立て心置きなく切腹候え」と、長治の家来の小森与左衛門を呼び出して、重棟は長治に切腹と開城を促したという。

羽柴与力別所孫右衛門、城中より小森与三左衛門と申す者を呼び出し、小三郎・山城・彦進三人の方へ状を遣はし、摂州の荒木・丹波の波多野果て候ごとくに候ては、末世の嘲哢（ちょうろう）口惜敷候。尋常に腹を切り然るべきの由申遣はし候処、両三人腹を切るべく候間、其外諸卒相助けられ候様にと、小森を使にて懇望の歎を申送る。

（『信長公記』巻十三　天正八年正月十五日条）

『武功夜話』と『信長公記』、どちらの史料にも、落城を目前にして城内に籠る人々を助けるために尽力した重棟の姿を伝えていて興味ぶかい。

ところが、『御征伐』と『別所記』は、このあたりの様子を次のように書いている。

『播州御征伐之事』

同（天正八年正月）十一日白昼、南構着人数、放火山下、秀吉、秀長懸入鷹尾并山城構。討果敵数輩、即居陣、爰詮度戦、敵之士卒取籠詰丸。今無頼所、唯相待落居之時剋由嘆息。長治見之、同十五日来使者而出懇望之状。其辞曰、

唯今申入意趣者、去々歳以来被附置敵対之条、連々其理可申分心底之処、不慮内輪之面々替覚悟之間、不及是非。某等両三人之事、来十七日申ノ刻、可切腹相定畢。然至于今相屈諸卒、悉可討果事不便之題目也。以御憐愍於被扶置者可畏入者也。仍此等之趣無相違様仰御披露。恐々謹言。

正月十五日　　別所彦進友之
別所山城守賀相
別所小三郎長治

浅野弥兵衛尉殿
別所孫右衛門尉殿

『別所記』

則彦之進畏テ状ヲ調、近習ノ士宇野右衛門佐ニ持セ、浅

野弥兵衛方ェ遣ス。浅野状ヲ請取使者ヲ具シテ、秀吉ノ前ニ跼テ一封ノ書簡ヲ捧グ。披テ見之レバ、

唯今申入趣意ハ、去々年以来敵対ノ事雖非無其故、今更不能述素意。併時節到来運既極。又何嘯臍哉。長治、山城守、彦之進両三人事、来十七日申刻ニ可切腹相定訖。残士卒雑人以下無科而可被刎首之段、不礼之題目也以憐愍於被助置者、今生之悦来世之楽何事　歟如之哉。此旨宜被披露者也。

天正八年
正月八日　　別所小三郎
浅野弥兵衛殿　　長治

重棟が秀吉方の武将に懇願して、城内の者たちの命を助けるため長治に切腹を促したとする『武功夜話』や『信長公記』が伝える落城の有様とは違って、『御征伐』と『別所記』は、長治の側から使者を送って切腹と士卒の助命を申し入れた形になっている。『御征伐』では、重棟は浅野弥兵衛とともに書状の宛名に名を連ねるだけである。『別所記』になると、宛名は浅野弥兵衛のみで、重棟は名前さえも消されてしまう。身を呈して城内の飢える者たちを助けたのは、もちろん長治であるが、それを許してくれるよう嘆願したのは重棟であり、重棟がいなければ、荒木村重の一族の如く、皆殺しの惨劇が三木城でも有り得たということを『別所記』の作者米野弥一右衛門は想像できなかった、というわけでもあるまい。長治を伴い、度々信長と会見したり、信長の手に属して戦った経験のある重棟は、家柄や血筋など問題でない、実力のある者が勝つ世がきたことを、身をもって感じたであろう。赤松円心の流れを汲む播州の名家というプライドだけでは生き残っていけないことを重棟は知っていたのである。保守的な兄吉親は、そのような重棟を裏切り者と見たのであろう。対立する二つの勢力に挟まれたとき、一族が敵、味方に分かれることは、どちらが勝っても家を絶やさぬようにするための常套手段であったことはよく知られている。三木合戦においても、加古川城主糟谷朝正は別所方に味方しているが、弟の武則は秀吉方に身を投じている。このように、何も重棟だけが不忠者というわけでもないのに、『別所記』は重棟に対して否定的である。

先に見た『別所記』の冒頭部分のとおり、合戦前、三木城内は、時代の流れにのった革新的な考えの重棟派と赤松の誇りを

捨て切れない保守的な吉親派に分かれ、重棟に従った一部の者たちは、城を出て秀吉方に味方したのであろう。城内に残った多くの者は、赤松の血をひく長治を守り、団結して成り上がり者の秀吉と戦ったのである。長治切腹と決まった後も、一人抵抗しつづけ最期は家人に討ち取られた吉親の行為も、裏切り者の重棟の口ききで成り上がり者の秀吉に降参するのは、赤松氏としてのプライドが許さなかったからだとすれば納得がいく。

『別所記』の作者米野も吉親と同じく、誇りを捨てて血筋のいやしい秀吉の下風に自ら立った重棟を軽蔑し、裏切り者と決め付けていたのであろう。『別所記』が三木落城にあたっての重棟の行動を書かず、その上長治の嘆願書の宛名からも重棟の名を消したのは、米野が赤松氏の誇りを捨てた重棟を心底嫌っていたからである。崇拝にも似た赤松敬愛の心を持ち続けて米野は『別所記』を書き上げたのである。

（四）

三木城内に籠る士卒たちを助けた重棟が嫌われるのは、何とも皮肉なことである。時代が下っても重棟の汚名は晴れるどころか、地元でますますひどくなっていく。

江戸時代、播州にゆかりの深い人物が、『別所記』を著しく増補したものに岩崎本『別所記』がある。この本の中で重棟はひどい扱いをうけ、逆に吉親とその妻は別所家を守る人物として描かれている。

長治若年なるを侮り、伯父孫右衛門重棟、元より奸佞邪慾の男にて、長治を失ひ其家を押領せん事を心懸ける。然れ共、長治には伯父山城守吉親後見し、家老三宅肥前守治忠守護しければ、重棟の我意に任せざりける。依之重棟益々兄吉親を憎ければ、彼家互に、吉親方、重棟方と家子郎等二ツに別れける。（別所家来由之事）

岩崎本もやはり兄弟仲の悪さを指摘しており、非はすべて重棟にあるとしている。また、別所の離反を知った秀吉が重棟を介して長治をなだめようと書状を送ったことも、

重棟畏て三木へ其旨を言送れ共、日頃悪人の孫右衛門が言越事なれば、秀吉と心を合せ落し穴へ入ん為也とて返答もせず。（三木城初度合戦之事）

と書き、更に落城の後も、

別所孫右衛門尉重棟は、三木落去に及びたるを聞、早速御悦びに参りける。され共、一族、兄弟と引分れ、しかも其落城を賀して参る事、甚不義の至りなれば、秀吉さのみ

称美もなかりけり。重棟が心には、今度一門の謀反に組せず秀吉の味方せば、別所の知行播州東八郡をも給らんと思ひしに、案に相違して指たる恩賞もなかりしかば、播州の諸士も其奸佞を悪みける。

（秀吉三木入城白子杢右衛門狂歌之事）

と重棟をけなすことはなはだしい。別所氏の菩提寺である三木の法界寺で現在も長治の命日に行われる三木合戦の絵解きの中でも、重棟は全く登場せず、長治の上卒助命を乞う嘆願書の取り次ぎも、浅野弥兵衛と織田信忠とするなど、重棟は無視され続けている。このように地元での「悪人重棟」のイメージがエスカレートしていくのに対して、播州から外にでて加筆されたであろう『別所記』伝本に、かえって重棟の名誉回復のきざしが見られる。仙台市の鹽竈神社所蔵の『別所記』は、秀吉方、別所方にかかわらず、人物の批評を削除し、事件を客観的に描こうとしているが、この伝本の中に、他の『別所記』伝本にはない次のような一文が見られる。

伝ニ曰、別所孫右衛門尉重揀ハ、「此事不可然」ト様々被申ケレドモ、舎兄山城守同心セズ。吉慶重検令知十万石宛。依之重棟五百余騎ニテ引退シ也。

「三木合戦の折、先祖は城内で苦労した」という仲間意識のようなものが、三木の人々の心底にあるのかもしれない。

天正六年ヨリ同八年マデ三年ノ間、百姓不残一味同心シテ死ヲ守テ籠城ス。忠義凛々トシテ秋霜ノ如シ。受人感義心結ブニアラズンバ此ニ至ランヤ。

地元に残る『別所記』の中の一本、加古川総合文化センター図書館蔵『播州三木別所記』にこのような記述がある。百姓までも別所家に忠義を誓い籠城したという。別所一族でありながら、一人秀吉方についた重棟を白眼視する要因は、この強い仲間意識にあるのだろう。『別所記』の作者来野弥一右衛門も、このような仲間意識を持っていたのだろうか。彼は名族ゆえに滅びざるを得ない別所家の不幸を描きたかったのかもしれない。

注① 『別所記』と『播州御征伐之事』の関係については、拙稿「『播州御征伐之事』の受容をめぐって－『赤松末葉記』、『三木記』、『別所記』の成立の様相－」（甲南女子大学大学院『論叢』第十八号平成八年三月）、及び「三木合戦関係軍記の展望」（『別所記－研究と資料－』平成八年三月　和泉書院）参照。

② 『播州御征伐之事』の引用は、国立公文書館内閣文庫蔵『別所惟任征伐記』の中の『播州御征伐之事』を用いた。

③ 『別所記』の引用は、東京大学付属図書館蔵『別所家盛衰記』を用いた。

④ 松林靖明先生「『武功夜話』に見る「別所謀反」」（『別所記―研究と資料―』平成八年三月　和泉書院）及び「『別所記』の虚構性」（『甲南女子大学研究紀要』第三十三号平成九年三月）参照。

⑤ 黒田家文書「小寺孝高、別所重宗宛消息」（『豊太閤真蹟集』第三号）。

⑥ 黒田家文書「羽柴秀吉宛黒印状写」（『織田信長文書の研究』第七六二号　吉川弘文館）。

⑦ 「惟任五郎左衛門長秀書状」及び「村二郎右頼家等連署書状」（『播磨清水寺文書』第二八三号、第二八四号）。

⑧ 備前釈文書「摂津荒木村重宛黒印状」（『織田信長文書の研究』第七六七号）。

※ 本稿は、「軍記・語り物研究会」第三〇三回例会（平成九年三月十六日）における口頭発表をまとめたものです。貴重なご教示・ご意見を賜った諸先生方に厚く御礼申し上げます。